

<現代のことば>降誕祭

著者	グリーン ジョン
雑誌名	京都新聞
ページ	7-7
発行年	2014-12-19
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00006041/

現代の ことば

ジョン・グリーン



京都在住がもう6年になる筆者は、母国イギリスに対し郷愁をあまり感じない。京都は最高にいい町だから。イギリスが恋しくなるのは、クリスマスの時だけ。キリストの生誕を祝う12月25日のクリスマス・デーは実は長い季節のクライマックスである。まず12月1日から始まり24日間のアドベント(キリストの渡来)がある。25日の降誕祭(クリスマス)

マス)後から「クリスマスの12日間」が続き、1月6日に祝祭の季節が終わる。クリスマス飾りをやると取り払うこの日は、生まれたばかりのキリストが全人類を代表する「東方の三博士」の前に姿を現す公禱祭の日である。

イギリスのクリスマスは、人々の感覚器官に強く訴える季節である。ツリーの甘い香り、家中・町中の色と

降誕祭

りどりの飾りつけ、宗教的キヤロルやクリスマス・デーに似た数々のポップソング、七面鳥とプディングやパイの味。教会も特別に飾りつけやイルミネーションやオルガンをもって普通以上に信者の感覚に訴える。筆者は今年日本在住の孫たち2人にイギリスのクリスマスを全身で体感してもらうため帰国する。

日本のクリスマスもそれなり

の伝統は確かにある。筆者が研究する明治期までその伝統は遡る。居留地の公使館や聖堂では祝会が早くから催されたが、大きな節目は条約が改正され、内地雑居が許された1899年であった。新聞がクリスマスに強い関心を示すのも翌年からである。例えば京都河原町カトリック教会の午前零時のミサの様子が朝日新聞に詳しく報道されるが、それは一例に過ぎない。

この頃から東京では明治屋、森永、不二家、丸善などはお店を飾り付け、クリスマスの宣伝をし、大売り出しを行う。クリスマスが近代日本の年中行事として定着し、プレゼント交換の風習が広く社会に行

り、20世紀の初めころである。20世紀の初めころである。20世紀の初めころである。

き渡るのは、日露戦争の直後からである。プレゼントは子供に贈るものだが、20世紀の初め頃に大好評だったのは、カードやクラッカーの他、英国製のヨタヨタする動物玩具、ドイツ製の自動車玩具、フランス製の積み木等があった。意外なもの、日本製の歯磨きと歯ブラシだろう。ライオンは「サンタクロースのプレゼント」として販売し出すと、ツリーに粉の歯磨きを吊るす習慣も普及していく。政府高官がクリスマス・パーティーに参加して、プレゼント贈答に加わり、天皇と皇后が救世軍によるクリスマス慈善事業等に寄付する

のも、20世紀の初めころである。イギリスは、クリスマス・デーも翌日のボクシング・デーも公休日。後者は教会の献金箱(ボックス)を開いて貧しい人たちにお金を配るからそう名付けられた。休日は日常の時間が止まり、考えることができる。キリストが2000年前に生まれた史実が21世紀の我々に何を語っているのか、我々がそれにどう答えた